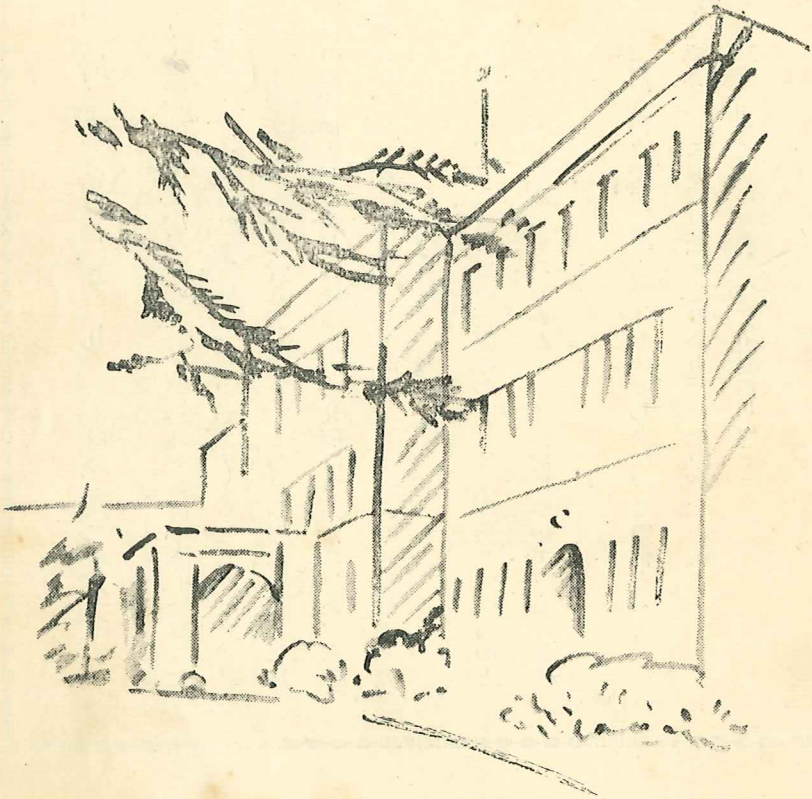
成蹊會誌

第十卷



—1955—

発展する成蹊会

＝社団法人設立と基金達成について＝

谷岡喜久藏

昨年の成蹊会役員会に於いて、当面する事業計画として「第一に成蹊会を社団法人に組織変更してその基礎を確立し、第二に都心に成蹊クラブを設立して会員相互の親睦を図り、第三に基金として五〇〇万円を募集して財政的充実を図る」の三大目標を発表しましたが、その後着々と実現方に努力致しました結果、今回社団法人設立と基金目標額達成の運びに至りましたことを会員各位に御報告申し上げる次第です。

社団法人設立につきましては、昨年の夏以来、役員会で種々協議の結果内にあつては本会の充実を図り、外に対しても本会の目的を闡明にし且つその存在を明かにするといふ意味に於いて、従来の法人格のない任意団体をより強力な公益法人である社団法人に組織変更することを決めたのであります。爾来設立許可申請に必要なる手続きをとり、書類を作成し、東京都教育委員会経由文部大臣宛申請致したのでありますが、文部省の意向としてこの種同窓会団体に公益法人として許可することは原則的に認めたくない。会員の資格について制限のある同窓会団体の一般公益性という解釈上の点で難色があつたが、種々折衝の末昨年十二月二十日付で受理され本年三月二十二日付をもつて正式に許可があり、四月十三日付登記を済ませ、五月十三日付旧成蹊会より社団法人成蹊会に財産を移転する届書を文部大臣宛提出して、こゝに社団法人の手続事務を完了した次第であります。尚設立趣意書並びに定款は別掲の通りです。

基金募集につきましては、屢々会員各位のお手許に趣意書並びに申込書を差上げました通り、その目的は本会の財政的基礎を確立し、これにより本会が今後遂行しなければならぬ諸事業達成の為の資金獲得であります。従来の年額会費制度の下にあつては、会計年度内に消費し――勿論有意義な支出をしていたのであるが払込者が固定し余りにも少人数の為に――赤字に汲々として、長期的継続事業の計画など思いも寄らなかつたのであり、本会をして発展せしめる為にはいづれの日にか、いづれの時にか、仕遂げなければならぬこの基金募集事業も、幸いにして発起人各位が企画され卒先して據金されたことが、会員各位の共感を呼び、この度目標額五〇〇万円申込の完了を見るに至りました。この貴重なる公金を保有し且つ有利に運用する為にこの度本会に財務委員会を設置し、万遺漏なきを期し度いと思つております。

尚本年度より終身会費制度を採用し、勧誘に努めておりますがその趣旨は基金と同様であります。成蹊クラブにつきましては、先に発表された三大目標の一つではあり、鋭意努力中でありますので、いづれ発表の時期があると存じております。

次に育英奨学事業について申し上げます。去る十月十三日開催の理事会並びに評議員会に於いて承認されましたもので、この規程は別掲の通りです。

現在成蹊教育を尊重し、その子女を学園に托さんとして頭痛の種は経費の点であると思います。事実現今の学園は従前と違つて月謝その他の費用を合算すると日本で指を屈する程高額であります。成蹊教育に共感し、折角入学せしめた父兄が、その後何等かの理由で経済的基礎を失い、その子女に何等の責任なく、しかも心身共に健全なるにも拘らず退学を余儀なくせしめられる事態を見るにつけて、本会に於いてこれを後援することは有意義と思います。

更に本会奨学規程は枠を拡げて成蹊学園の在学生に留らず、本会々員の子女に迄及んでおります。曾つて学園に学んだ同窓生が幾星霜を経て浮沈消長あるのは世の習いで、会員相互扶助の精神はこゝに於いて高く発揚されなければなりません。本会と致しましては育英資金の拡充を図り所期の目標を達成し、御要望に応じ度く存じております。

その他学園に対する直接的な後援、在学生の運動部、文化部団体に対する後援等、本会が考慮しなければならない問題が多々ありますが他日を期し研究致し度いと思います。

翻つて本会内部の充実は漸くその著に着きましたが、クラブの設立、全国六支部の育成、会誌の発行回数の増加等、企図されなければならぬ問題が山積しておりますがこれら一つ一つを着実に推し進めて参り度く思います。

終りに本会の現況を申し上げますと、総数四〇七二名（成蹊高等学校卒業生であつて、成蹊大学在学生を含む　住所不明会員を除く）この内基金申込者三〇四名、終身会費申込者四七三名、年額会費申込者五七三名（三十年度以降の払込者）合計一三五〇名（十月一日現在）で総数の約三分の一の会員が定款第六条第一号による正会員となります。

次に財政的見地から概観しますと、基金申込額五〇五万円、終身会費申込額二二二万円、合計七二七万円（十月一日現在）となつており、この内払込額は二七三万円（内三〇万円は三十年度一般会計に繰入れる）を割引興業債券及び三菱信託銀行貸付信託の形で保有しております。これを数年前の財政状態に比較して隔世の観がありますが、若し本会をして飛躍的に発展せしめる方途ありとすれば、正会員（会費納入者）に非らざる二七二二名の卒業生（準会員）各位が、本会の意義と目的とに賛同せられ会費を進んで納められることによつて可能であると信じます。（常務理事）

下、山に海に短い夏を楽しんでいます。

安井雄史 高11
現在東京タイムズの広告部で硬派を担当しています。デフレ経済の経営合理化の線は各社の冗費節減となり、それは第一に宜伝費等の節約となつて我々の生活を苦しめています。

八代俊彦 新高5（成蹊大学）
昭和廿九年三月成蹊高校卒、同四月成蹊大学へ入学、現在政経学部二年在学。野球部に籍を置く。

柳瀬正光 専別3（東洋カ1ボン）
本春二月三菱化成の関係会社である東洋カーボンに派遣されて永い博多の生活に別れを告げて東京へ参りました。九州支部の皆さんに御挨拶する暇もありませんでしたが大変お世話様になり楽しく過したことを感謝して居ります。何年振りかの東京生活と趣の異る会社で苦労を重ねて居りますが宜敷御指導と御協力をお願い致します。

山越康雄 高24
昭和廿九年四月、日産化学工業株式会社へ入社。同年七月同社富山研究所へ赴任。

山崎英也 高19（東京都庁衛生局）
相変らずの役人勤め。東京都市場衛生検査所にて放射能に代つて流行の食中毒で大童「いか」と「たこ」に悩まされている感家庭は二月に長男誕生。一姫二太郎の理想の家族構成で明るい生活を送つています。

山田彬 新高5（東京大学）
東大一年で駒場生活をして居ります。身心共に元気です。

山田八啓 大2（磐城セメント）
栃木県の山の中にたてこもつてからすでに二年半、すつかり都から忘れられた形です。セメントブームも今年に入つてどうやら頭打ちになつて来ましたが事務や仕事に相変らず多忙を極めています。にもかかわらず今年は小学校四年の夏の学校に参加し一週間、葉山の海で甲羅をほして来ました。

山田卓彌 高20（農林中央金庫）
相変らず御無沙汰して居ります。八月五日女児出産、何時の間にか親父となりました。当地にお越しの節は是非お立寄り下さい。

山田雅朗 高21（日本電信電話公社）
東北大学を廿六年に卒業して電々公社に入社、やつと東京に帰つて来たのもつかの間、昨年九月に再び仙台に転勤になり現在に致つて居ります。

山中信夫 新高3（東京大学）
学部は工学部応用化学科化学工学となりましたが僕の記章のTは工学部ではなくて、テニスのTの様です。殆んど毎日本郷のコートに居りますからお立ち寄り下さい。

山中恵章 大3 大日精化工業
本年四月、貿易課から業務第一課に移り商売人となる為、一生懸命にやつて居ります。

横川洋一 大3（日産火災海上）
至極元気。

吉河一郎 高21（東京大学工学部大学院）
成蹊卒業以来既に七年を経過し大学院生活も四年目に入りました。相変らず石油関係のことを取扱つて居ります。

吉田泰三 新高5（北海道大学）
北大に本年度唯一人成蹊から入学し、全く孤軍奮闘の態で、又最近では、北海道旅行者の案内で、夏休暇もなかなか帰省出来ない始末です。先輩の御指導を仰ぎます。

米田昭 高23（東京地検）
今年の四月から勤務先が東京地検に変り、サラリーが二、三割増え、支出が五割位増加し、労働量が二、三倍になりました。

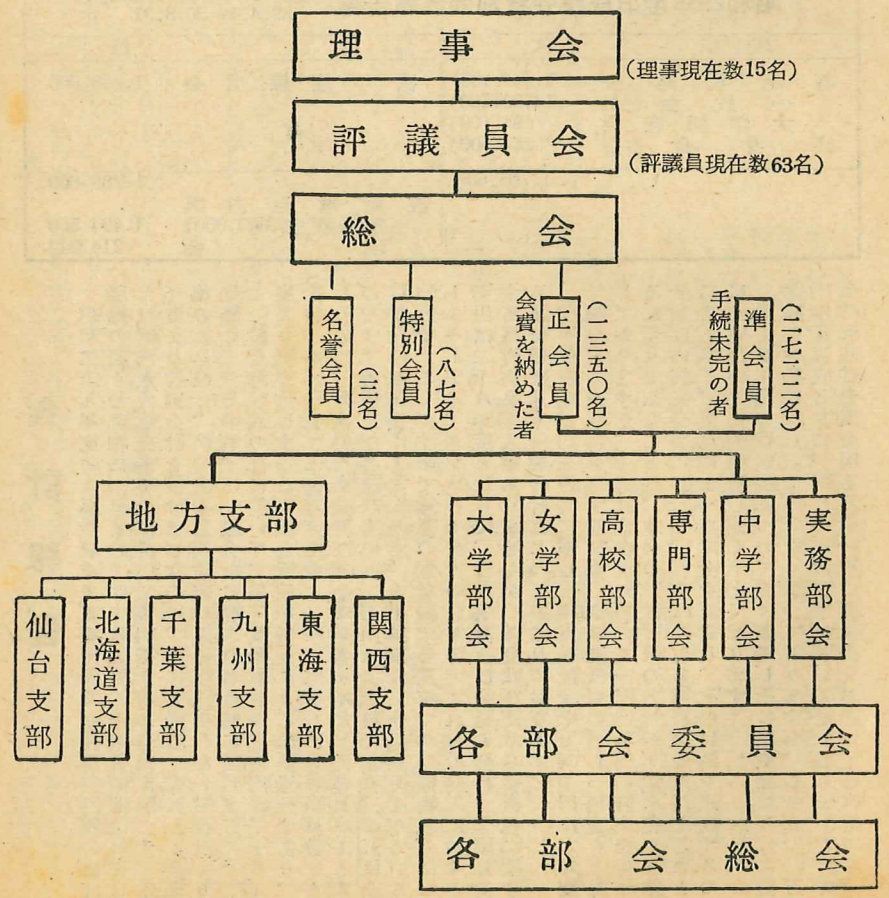
脇村孝三郎 高9（山林業）
サラリーマンを辞めて家へ帰つてから一年になります。植林や伐採の見廻りで月に一度は奈良県境の山へ登ります。山と云へば、成蹊一年の時渡辺兵力先輩の指導で、谷川岳へ登つたことや、静専寮で尾崎先生、塩谷君と一諸に八ヶ岳へ登り嵐に遭つて困つたことなど思い出します去る五月上京の際、栗林、田中両兄の御骨折で、同窓諸兄と会合出来本当に嬉く思いました。

和田象二 高11（凸版印刷）
今春四月戦災の焼けあとの土地にさゝやかな家を建てそこへ移りました。すぐそばの戸山が原はすつかり変つて昔のおもかげは少しもなく感慨無量であります。あの辺に御出の節は御立寄下さい。

渡辺一美 専門5（早川運輸）
成蹊クラブ設立の御計画誠に喜しいことです。其処に行けば成蹊の誰かに御会い出来、且つ簡単にお茶を飲んだり食事も済せればよいがと念願して居ります。此の殺伐な世の中に我々は成蹊会員であることに幸福を感じます。

原田直治 大4（一世印刷）
毎日多忙で病が近寄らぬほど元気です成蹊会にはいつもお世話になつて居ります社会出たての未熟者故今後共深い御指導をお御願申し上ます。

会員消息を募集しております
から御投稿願います

社団法人 成蹊会組織図

（昭和30年10月1日現在）